

——ズキッ。

後頭部から広がる鈍い痛み。一面が闇に包まれた視界。

(「……は、まだ……」)

いまだ半覚醒のほやけた両眼で辺りを見回す。光が差さない場所なのか、それとも強力な暗闇薬でも飲ませられたのか、周囲は黒インクの如き漆黒に彩られている。

悪い夢の類。その可能性も否定できないが、先程から一定周期で神経細胞を駆け巡る痛覚がその説を一蹴する。

(「……………」)

地図のないダンジョンに初めて足を踏み入れた時の様な不安と焦燥感に突き動かされるまま、眼前に細くたなびく記憶の糸を手繰り寄せようと頭を振ってみる。だが、その甲斐空しく思考は徐々に混濁し、細長い針を脳に突き入れてゆくような高音のノイズだけが静寂を支配していった。

……………。どれくらいの時間が過ぎたのだろう。

網膜のシナプスがフラッシュの如く明滅する光以外、先程と変わらず空間を「黒」が支配する世界。このまま俺は、この闇牢に永住させられてしまうのか…………。とりとめのない散逸した思考が脳裏を駆け巡る。

…………その時だった。

「——せい……やあっ!!」

「オグアッ!!」

「……おっ、目が覚めたみたいだな!」

不明瞭な記憶の海をモーセのように突き割る少女の声。と同時に首筋を弾ける様な衝撃が襲う。

「なっ、何しやがんだっ!!」

反射的に背後へ向き直る俺。その視界の先には眩いばかりの魅力的な裸体を晒す少女達が立っていた。

「……あ、あれ……」

嘘のように掻き消えた漆黒の闇。その急な変化に戸惑い思わず辺りを見回してしまう。

「ちょっとお、何キョトってんの?」

中央に立つ、チョンと尖がった耳と切れ長の眼が印象的な赤髪の少女が片眉を上げ、凄んでくる。

「お兄さん、リラックスして下さいねえ。」

「これはマウ達からのささやかな御礼なのです。」

——びるるん。

ふんわりと艶めく金色の髪を濡えた身形の良い少女は、そう言うてにっこり笑うと、腰に手を当てて大きく胸を張った。その勢いで、大きく膨らむ胸の双丘がたわわに揺れ、俺の視線を釘付けにしてしまう。



「さて、今からイイ」トしてやっからな！
存分に楽しめよ〜。このっ、色男ッ！」

睡蓮木を思わせる鮮やかな紫の髪をした少女は、口端から八重歯を見せるほどに口角を上げ、満面の笑顔で此方へと近づいてくる。

(……JVS)

堂々とした振る舞いに、艶かしく汗ばんだ褐色の肌……。ツンと天を指す胸の先端は薄っすらとした桃色に煌き、その「コントラスト」に思わずノドを鳴らしてしまう。

「ちゅいと失礼するぜ、ちゅー！」

「……おっ、おうふうー！」

瞬時に身を屈めた少女は、俺の右足を両腕で抱え込むと、上半身を捻るように回転し、流れるような動きで俺を地面へと叩き付けた。

「そおれ、」開帳お♪

「これこれ……お〜立派、立派ッ！
兄ちゃん顔に似合わずイイモン持ってるねえ〜★」

もはや男勝りというより、タダの中年オヤジ的な言い回しの少女は、強引に俺のトラウザを擦り下げ、窮屈そうに佇む半勃起状態の男性自身をインナーから開放し、赤く膨らんだ先端をやわやわと撫でてきた。そのむず痒くも刺激的な快感に、思わず腰を震わせてしまう。

「あ〜、プリシユウ、ズルイよーっ。マウもやる〜！」

「そうよ、独り占めなんてさせないんだからっ」

「ぶう、と頬を膨らませた金髪の少女。その駄々をこねる赤子のようなアピールに乗ったのが、赤髪の少女も不満を露にする。

「誰もハミ」にするなんて言っただけでねえって。

「ほら、二人ともこいつの手●ポで遊ぼうぜ♪」

……「イイ」と、八重歯を見せた少女は、やや荒っぽく俺の男性器を握ると、遠慮なくこしこしと扱きたてる。

「うっ……くは……。」

見る見るうちに血流を増し、屹立していく陰莖。熟したペルシコスと思わせる亀頭は赤く充血し、その先端に穿つ鈴口からは透明な粘液がじわりと染み出している。

「ふうふうん。お兄さんのオチ●チン、パンパンだ〜。

「ほらっ、マウのも、もうこんなになっちゃってるよお♪」

「……ふんっ、アタシだってバッキバキなんだからっ」

股間の肉棒を右手で握った少女は、無邪気な笑顔を浮かべると、俺の性器の先端と己のソレを擦り付けるようにあてがってきた。それを見た赤髪の少女は、まるで拗ねる子供の如く頬を染めながら、先走りを滲ませた先端を三人のソレと一緒に重ね、擦り合わせてくるのだった。

